演目みどころ

解説：おくだ健太郎

舞踊「義経千本桜　吉野山」

「義経千本桜」というお芝居のなかの、舞踊仕立ての一幕です。
兄の頼朝との不和に悩む義経は、このまま自分といては危険だから、と愛しい静御前をのこして京を離れます。その際、自分の代わりにこれを大切に保管してくれ、と、天皇家からいただいた「初音の鼓」を、静に託します。そして、家来の忠信に彼女のボディーガードをまかせます。でも、静は、義経とはなればなれでいることには耐えられません。しかも、京を発った義経が、その後、苦難の旅路のはてに吉野山の奥に身を潜めている、との噂。心配で、居ても立ってもいられず、義経を追ってみずからも、忠信と共に、吉野の山中に分け入ってゆくのです。
ふたりがさしかかる吉野山は、今まさに花盛り。「一目千本」とむかしから人々に愛された、桜の美しい風景です。
主従とはいえ、おのずとそこには、春のうららかさと混然一体となった、「男と女が並び立った、愛らしい空気」がただよいます。ひな人形のようです。
忠信は、兄の継信が無念の戦死をとげた、壇の浦の浜辺での源氏と平家の合戦のあらましを、静に語って聞かせます。手にした扇が、長刀、かぶと、馬の手綱などなど、さまざまな表現を生みます。この後早見藤太というコミカルなピエロのような男が、静御前に片思いのちょっかいをだします。忠信はボディーガードの頼もしさで藤太をこらしめます。
義経を静をしたい、亡き兄を偲ぶ、忠義の侍・忠信。ところが、その正体は、じつは、キツネです。初音の鼓の革に用いられてしまった、親ギツネをしたって、子ギツネが、本物の忠信とすり替わって（忠信に化けて）、静と行動を共にしているのです。その真相がすべて明らかになるのが「義経千本桜」というお芝居のクライマックスなのですが、このくだりは、いつか別の機会に上演されるのを待ちましょう。

芝居「白浪五人男　稲瀬川勢揃の場」

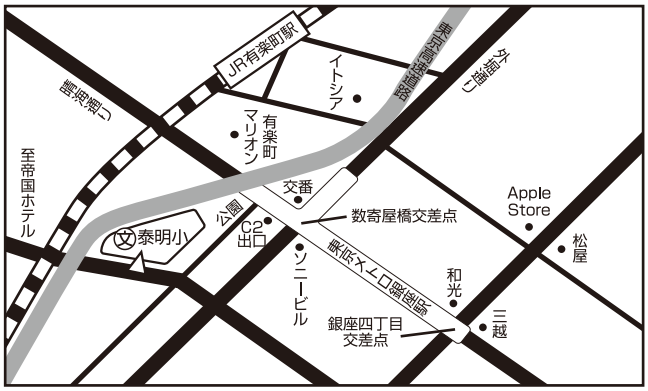
浜松屋の仕事がきっかけとなり、日本駄右衛門一味へお上の詮議の手が伸びることとなる。五人男は追手を逃れて、ひとまず鎌倉まで落ち延びようと、桜が咲き乱れる稲瀬川の堤までやって来る。揃いの小袖に番傘という粋な姿で、これ以上逃げ切れなくなったら最後のひと働きをして、縄目にかかろうと覚悟を決める男たち。そこで待ち伏せしていた捕手たちに取り囲まれるが、潔く「成敗受けん」と啖呵をきり、一人一人名乗りをあげ、捕手たちへ立ち向かっていく。「白浪五人男」も「三人吉三」と同様、河竹黙阿弥が生んだ、歌舞伎の「悪」のヒーローたちです。

盗みはすれど非道はせぬ、リーダーの、日本駄右衛門
江ノ島のお稚児さんが不良になった、弁天小僧菊之助
ガキのころから手くせが悪い、忠信利平
もとは武家のお小姓、ナイーブな、赤星十三郎
浜育ちの無頼派、哀れは身に知らぬ、南郷力丸

悪事のプロフィールを五者五様、花盛りの稲瀬川の堤にずらりと並んで、七五調の名調子でつらねます。地色は揃いのむらさきに、稲妻だの鳥だの獣だの、図柄も個性いっぱいの衣裳。手には傘、とビジュアルもばっちり！見ても聞いてもたのしい、歌舞伎屈指の人気場面です。

アクセスマップ

JR山手線・京浜東北線「有楽町駅」銀座口より徒歩５分
東京メトロ　銀座線・丸ノ内線・日比谷線「銀座駅」C-2 出口より徒歩２分



本公演は座席のご用意がございません。立見での鑑賞となりますので、あらかじめご了承ください。

※車椅子でお越しの方は事前にお問い合わせください。
※会場となる小学校の校庭面（コーティング）保護のため、ゴム底等の靴をお願いしております。靴（特にハイヒール、後金付の雪駄など）によっては入場できませんので、会場が準備するスリッパへ履き替えていただきます。校庭面の保護にご協力ください。

「新富座こども歌舞伎」の会とは？

「新富座こども歌舞伎」は、今も歌舞伎座のお膝元であり江戸の文化が色濃く残るこの地において、こどもたちが歌舞伎を体験することで歌舞伎に縁の深い地域の文化や資源、そして日本の伝統芸能に興味を深めてもらうとともに、故郷の文化として育てていきたいという思いを込めて、地域の町会や小学校の協力を得て発足しました。
こどもたちとともに、老いも若きも幅広い世代の町衆で、歌舞伎って面白い！すごい！奥が深い！とわくわく楽しんで活動しています。